

もっと知りたい

ふふふ

45

# 「川中島の戦い」は八幡がスタート

の戦いである。

しかし、3カ月後の8月、武田信玄の執拗な侵攻に自落した村上は再度、長尾に援軍を求め、9月1日に再び八幡で戦い、今回も優勢で旧領を奪還した。

その後も武田軍の北信侵攻は続き、2年後の1555年には、「第二次川中島の戦い」へと移って行く。

これで分かるように、「川中島の戦い」は、武田信玄の信州侵攻に多くの武将達が屈服するなか、最後まで抵抗するとともに、隣国の強力な長尾景虎に助けを求める策に出た村上義清と、これを受けて立つた長尾景虎の武田からの越後自身の防衛を兼ねた戦いがスタートであった。

そして、八幡が戦場となつたのは、村上旧領入り口で、善光寺平一望のこの地が、武田軍にとって相手の動きを見て迎撃するに絶好の場所であったからではないだろうか。ただし、結果は多勢とみられる長尾・村上軍が優勢であった。

460余年後の今、八幡の住民有志はこの史実を後世に伝え、「歴史・文化ゾーン川西」の新たな史跡とするため、記念碑建立の活動を開始した。

八幡 南澤 和夫

が葛尾城や塩田城を拠点に更埴地方も所領としていた「猛将」村上義清であった。

村上義清は、武田信玄の侵攻に対し、1548年上田原の戦い、1550年戸石城の戦いともに勝利し、信玄の北信侵攻の壁となっていた。しかし、1551年、武田側の真田幸隆の急襲を受け戸石城を失い、以後急速に周辺の支族（屋代や塩崎、石川氏等）が

武田の武力に屈服し武田側に寝返つたため、ついに1553年4月9日、葛尾城を放棄し、中野の高梨政頼を介して越後の長尾景虎のもとへ逃亡した。

村上の支援要請を受けた長尾景虎は早速、5000人の長尾・村上・高梨軍を編成し、村上旧領地奪還に向け4月20日には塩崎・稻荷山までやって来た。

天文23年4月22日は、西暦1553年6月3日（新暦にあたる。この日以後12年、五次（12回）にわたり、武田信玄（晴信）と上杉謙信（長尾景虎）が繰り広げた「川中島の戦い」は第1回目の戦いが当地、千曲市八幡で行われた。

その4カ月後の9月1日（新暦10月8日）にも八幡で第3回目の戦いが行われている。後世の歴史家は同年8月の第2回目の戦い「布施の戦い」と併せて「第一次川中島の戦い」と整理している。

なぜ「川中島の戦い」が始まったのかを当時の記録文書『高白斎記』（武田家家臣の日記で信憑性が高い）を読解した歴史書や『更科埴科地方誌』（昭和53年）等から整理してみた。

武田信玄は1541年、父を追い出し甲斐の国主となるとともに、強力な軍事力をもって現長野県の諏訪・伊那谷・中信地方・安曇地方・佐久地方を次々と侵攻し、支配下に

残るは上小地方と北信となるが、そこに立ち塞がったの



棚田より「八幡古戦場」を望む

一方、坂北の青柳城に前線基地をおいていた武田軍はこれを察知し、8人の武将の軍を八幡に送り込み迎撃に備えた。

4月22日、両軍は八幡で衝突したが長尾軍が優勢で、翌23日には葛尾城を奪還し、その後、塩田城まで奪還するとともに武田軍を深志城まで後退させた。これが第1回目